

# 生きづらさをこえる拠点としての の若者たちの「たまり場」

— 東京都国立市公民館の  
「青年室」と「喫茶コーナー」の実践 —

島本優子(国立市公民館・青年室スタッフ)  
井口啓太郎(国立市公民館・社会教育主事)

翻訳協力者: 大橋靖子(国立市公民館・青年室スタッフ)

# 国立市の概要

- 東京都のほぼ中央に位置する。面積は8.15km<sup>2</sup>で、全国の市では4番目、都内の市では、狛江市に次いで2番目に小さい。
- 市内北部の学園都市エリアは、東京都文教地区建築条例により文教地区に指定され、一橋大学を縦断する「大学通り」を中心に、都市景観を重視したまちづくりが進められてきた。
- 人口は現在約7万5千人。
- 公民館は市内のやや北側に位置する一館のみ。



# 東京都国立市公民館 外観



国立市公民館

喫茶わいがや  
美味しいハンドドリップ  
コーヒー 220  
市内専門店茶葉使用  
紅茶 240  
国立市公民館内

定礎

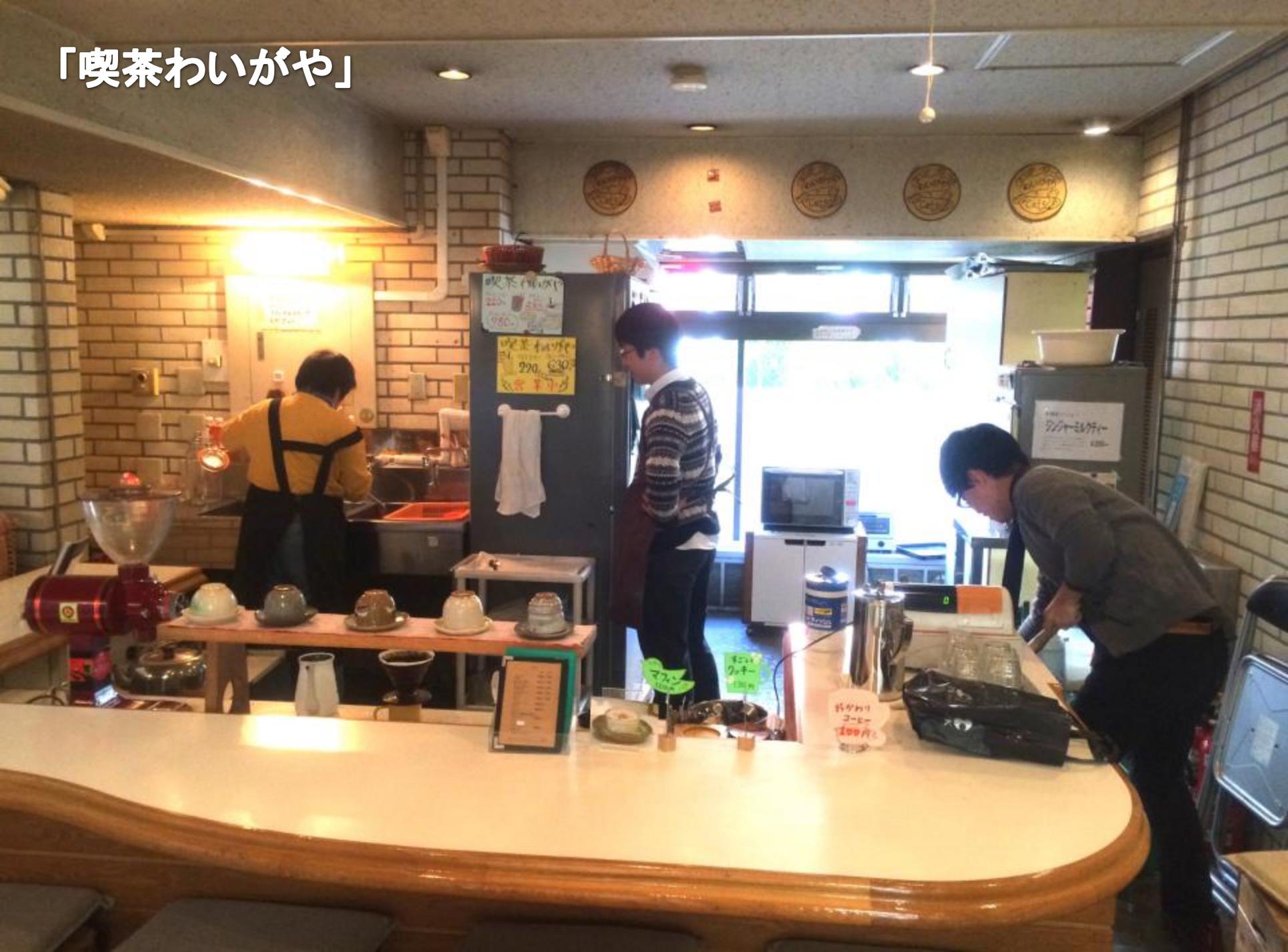
「喫茶わいがや」

「青年室」

ロビー



# 「喫茶わいがや」



# 「青年室」



# 目次

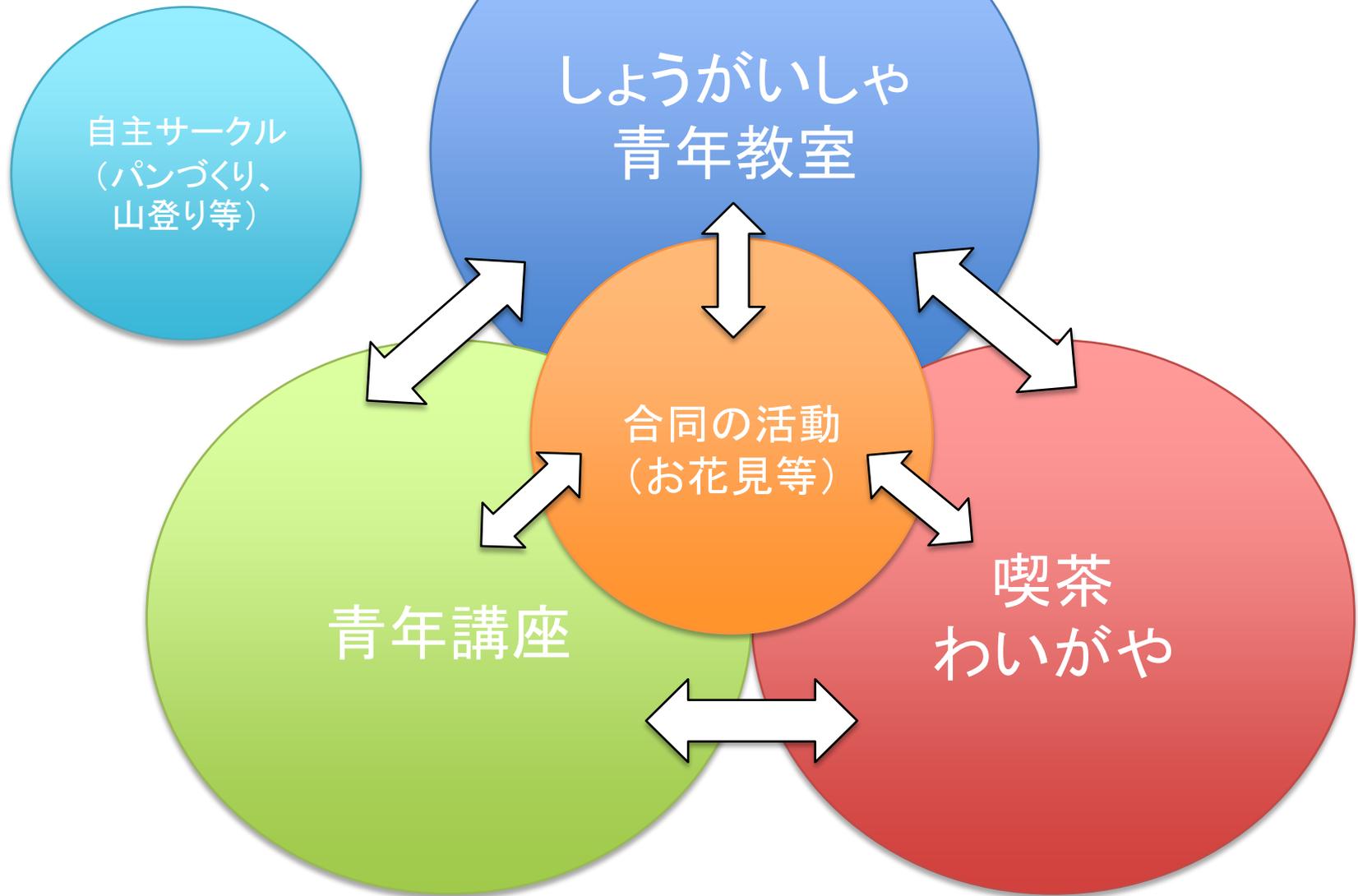
1. 「青年室」と「喫茶わいがや」の歴史
2. 活動の概要と相互の関連性
3. 活動の特徴と困難を抱える若者の参加
4. 「自信回復場所」という機能
5. 現代日本における「若者問題」
6. 「若者自立支援」との対比
7. 社会参加支援における公民館の役割
8. これからの課題

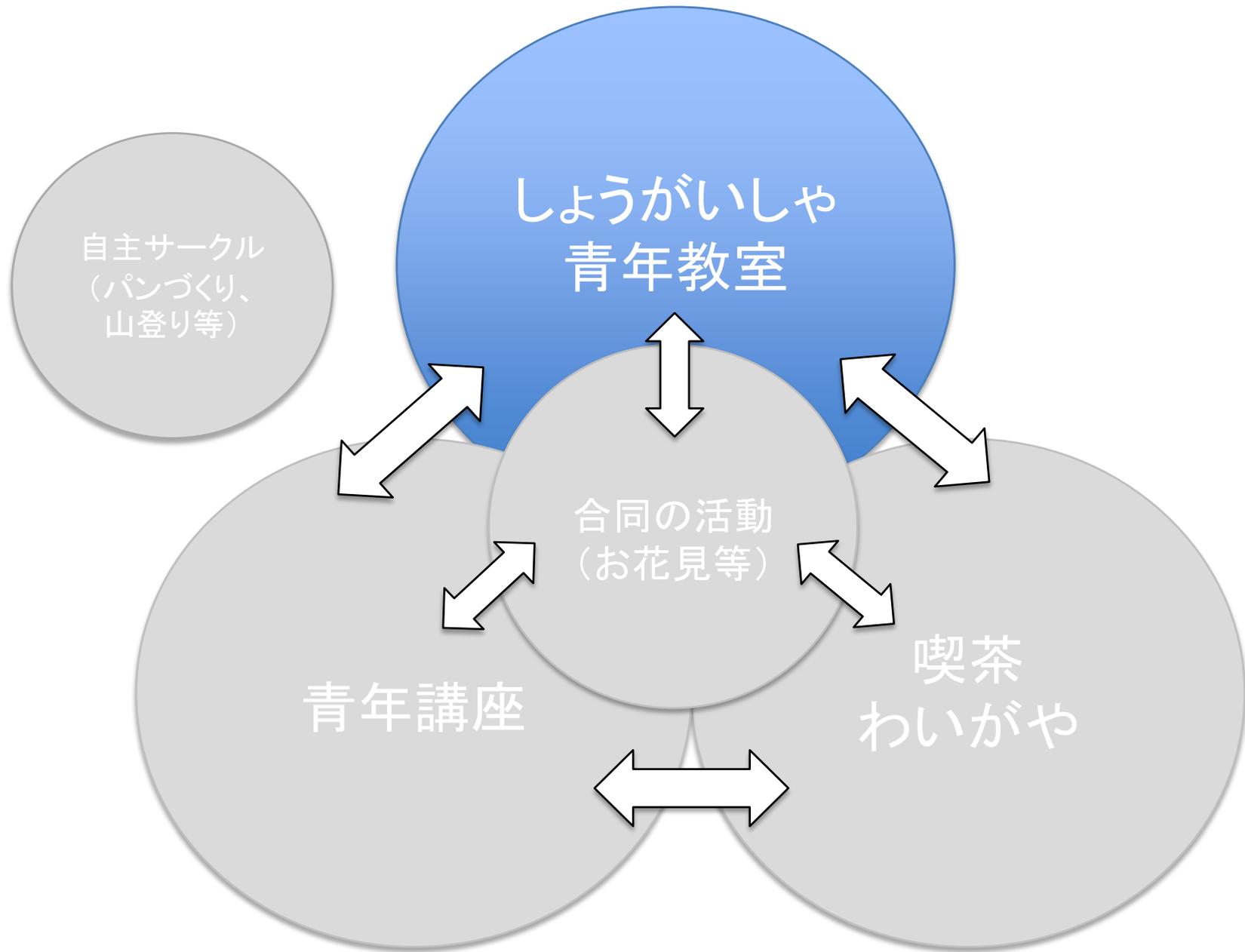
# 1. 国立市公民館の「青年室」と「喫茶わいがや」の歴史

- 1953年：青年学級振興法
- 1955年：東京都国立市公民館開館
- 1960年：「商工青年学級」開講（「金の卵」と呼ばれた勤労青年を対象とする余暇活動）
- 1967年：「青年室」開設
- 1970年代：青年学級の停滞。「目標設定のある学習」よりも自由な「たまり場」での活動がスタートする。この活動に、しょうがいしゃ青年も加わっていく。
- 1980年：「しょうがいしゃ青年教室」開設
- 1981年：喫茶コーナー「わいがや」オープン

⇒ 「青年」の活動をベースに、しょうがいしゃ青年が加わり、活動の対象、形態が移り変わりながら、現在に至っている。

## 2. 活動の概要と相互の関連性

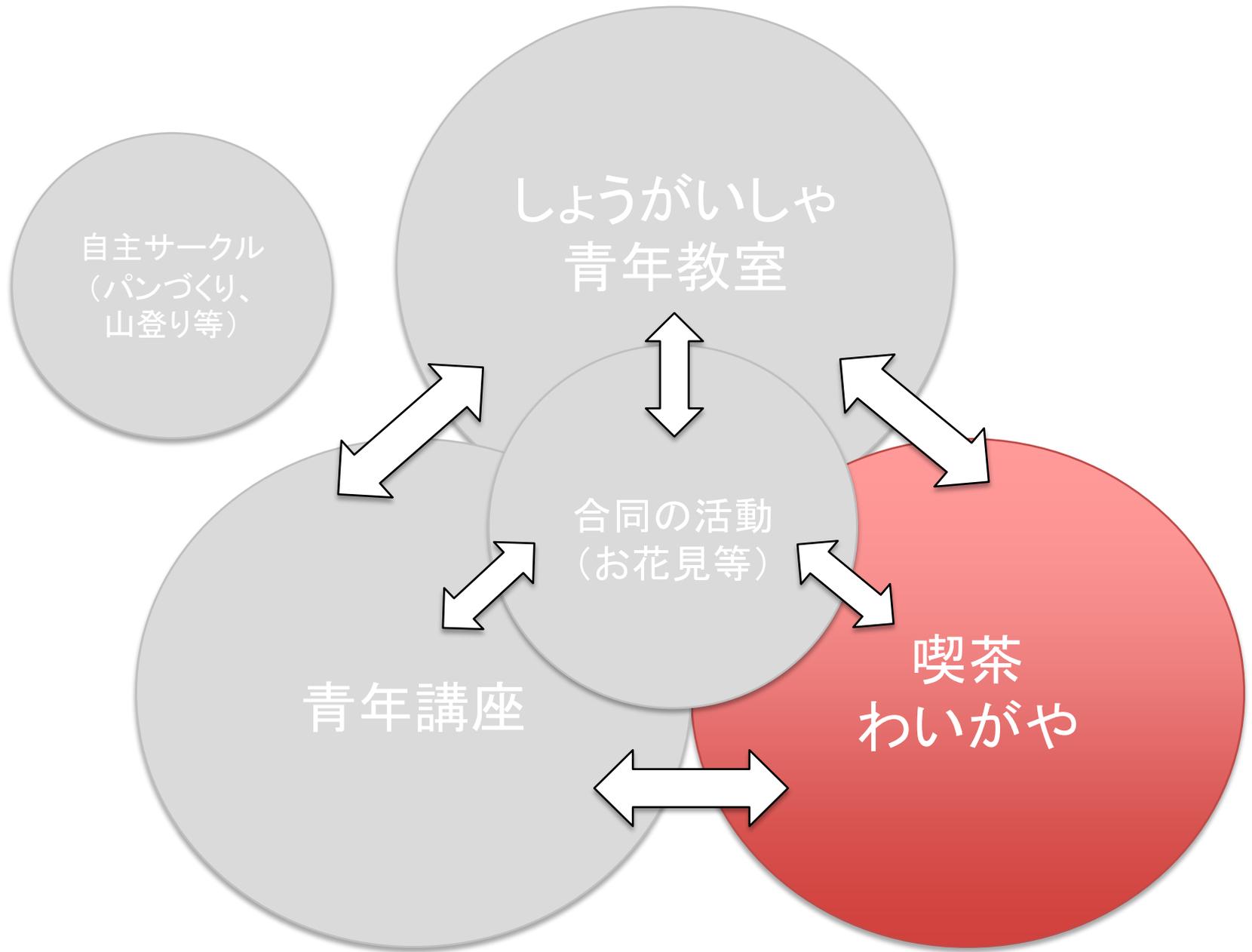






## しょうがいしゃ青年教室

- 国立市内在住・在勤のしょうがいしゃ向けの余暇・文化活動。月1回平日の夜を中心に活動している。
- スポーツ／クラフト／料理／喫茶実習／陶芸／リトミック／YYW(やりたいことを企画し、実行する講座)
- 運営は公民館職員とスタッフ(学生、会社員等)により担われ、スタッフにとっても、しょうがいを持つメンバーと関わる学びの場になっている。



# 喫茶わいがや

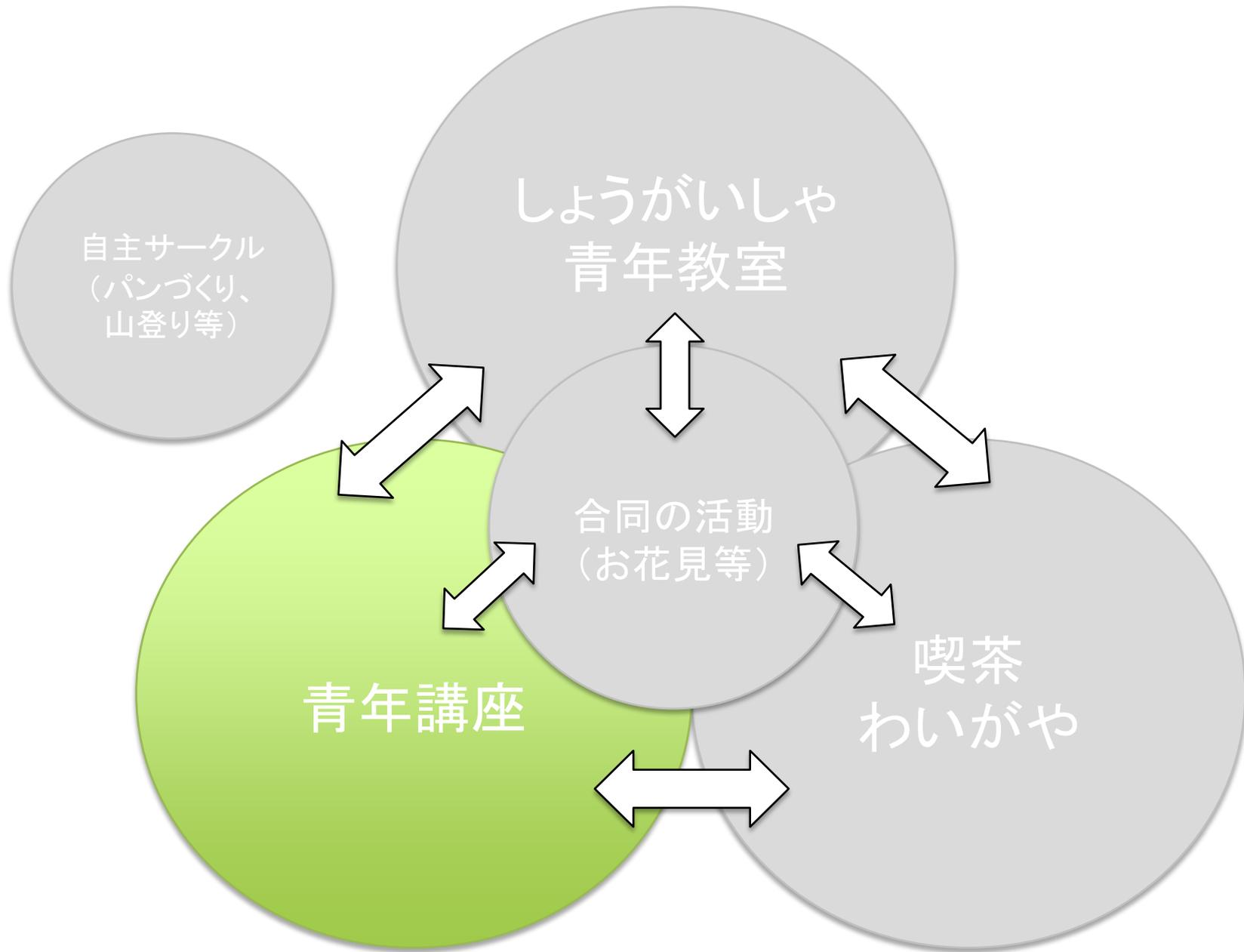
●市民グループ「障害をこえてともに自立する会」(会員数約140名)が運営。

●火曜日～日曜日の12～18時で営業。10～30歳代を中心とするスタッフ約15名(学生、会社員、主婦等)がローテーションで活動。

●「しょうがいしゃ青年教室」の喫茶実習コース実習の場。

●1日の平均売り上げは、約6000円。スタッフの平均時給は200～500円程度で、わいがやの活動で生計をたてる専従スタッフはいない。







## 青年講座

「青年室」に関わる若者と公民館職員が企画する市民向け講座。

＜過去の例＞

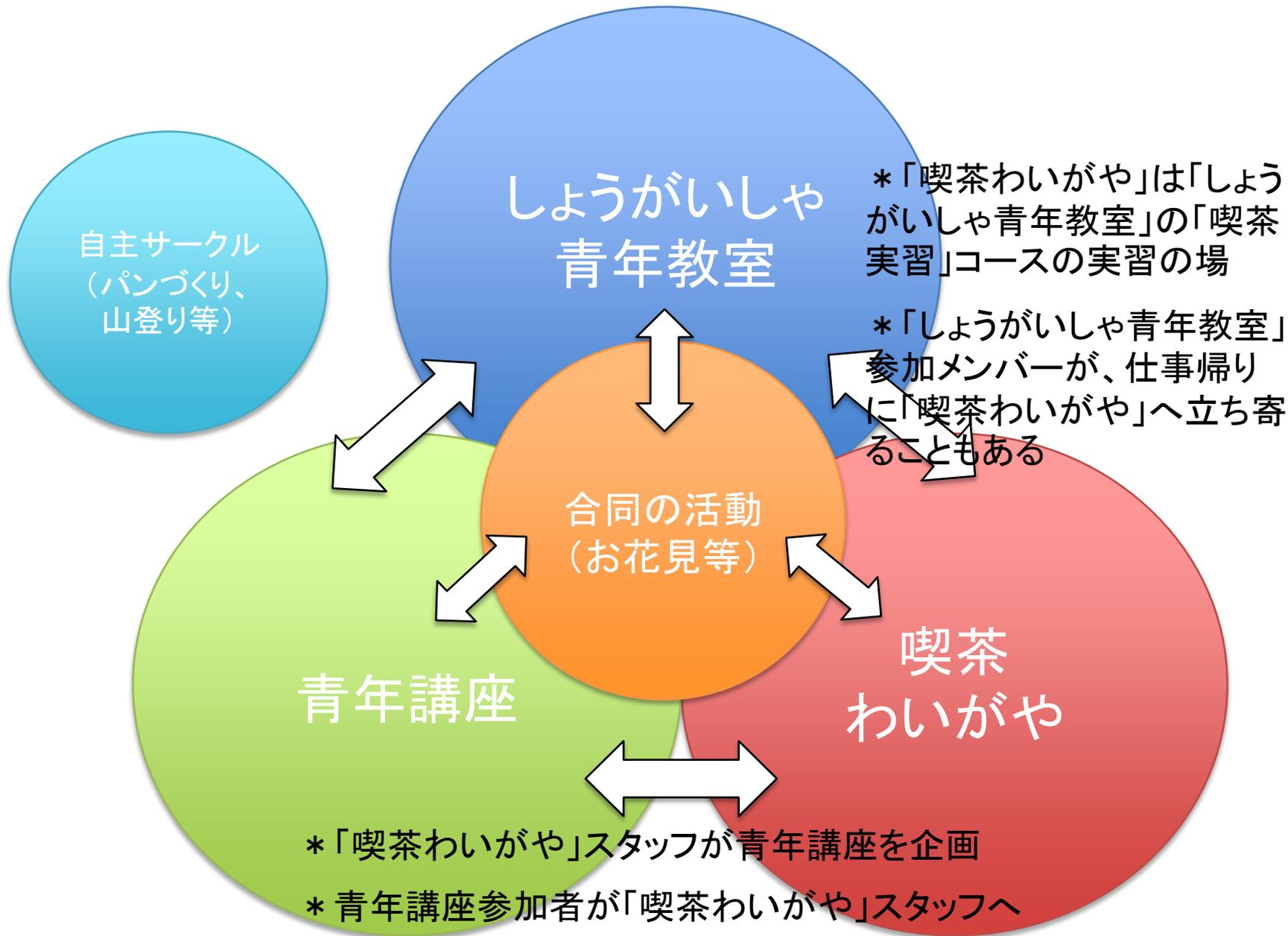
- ・若者の労働問題を考える講座
- ・インド音楽の講座
- ・銅版画製作ワークショップ



COFFEE  
HOUSE

これらの活動の様子は、  
Facebookでもご覧いただけます。「コーヒーハウス  
(国立市公民館青年室)」  
で検索してみてください。





### 3. 活動の特徴と困難を抱える若者の参加

- <型のある活動>と<無目的な「たまり場」>の組み合わせ

⇒ 多様な若者が、多様な入口から集まり、自分のペースにあった様々な関わり方をする事ができる。

- 活動参加者を若年層に限定していること

⇒ しょうがいを持つメンバーと持たないスタッフが、同じ目線で、話し合いながら活動をしていくことにつながる。

⇒ これらの特徴は、しょうがいしゃとともに行う活動という枠をこえて、ひきこもりや不登校体験、病を抱える若者の参加も可能にしている。さらに、そうした若者が、活動を通して、自らの「生きづらさ」を少しだけこえることにもつながっている。

## 4. 「自信回復場所」という機能

### 元「喫茶わいがや」スタッフ・Fさんの事例

- 高校2年生のときに体調を崩して学校を休み、3年生のときに高校を中退した経験を持っていた。
- 苦しい毎日を送っていたFさんは、ある日、公民館だよりを見て「パン部」(青年講座:パン作りの講座)のお知らせを見つける。
- 当日になると不安の方が大きくなったが、家族に後押しされて参加し、講座の中では不安を感じず楽しく過ごすことができた。
- 「この場所は私に合っているかもしれない」と感じたFさんは、「喫茶わいがや」の活動にも参加するようになる。

「徐々に自信を持って一人でコーヒーが入れられるようになりました。月に1回開かれるわいがや会議にも参加し、自分の意見がわいがやの経営に反映されると責任感や達成感が生まれました。私が淹れたコーヒーを飲んで下さったお客様が『おいしい』と言って笑顔になってくださると、私も気持ちもちが明るく前向きになりました」

●様々なスタッフ、客らとの関わりの中で、自分自身の意見や作ったものが認められ、頼りにされていく中で、Fさんは少しずつ自信を取り戻し、「少しでも一歩前に進みたい」という思いを抱き始める。

●その後、高卒認定試験に合格、地方の大学を受験して、現在は教員を目指して大学生活をおくっている。

ひきこもりや不登校体験、病を抱える若者の活動への参加がみられる中で、「青年室」や「喫茶わいがや」は、「様々な背景を持つ人びととの人間関係の中で、受けとめられ、自信や自己肯定感を育んでいく／取り戻していく場」となっている。  
＝ 「自信回復場所」  
(レジリエンスを発揮する場)

こうした機能を成り立たせているのは・・・

●長年にわたり、しょうがいを持つ若者と持たない若者が、背景の違いをこえて、話し合いながら活動をしてきた蓄積。

その一方で・・・

●「万人と仲良くなる能力」を身に付けることが目指されているわけではないことに留意が必要。対話により、苦手な相手と分かりあえる可能性も残しつつ、適切な距離をとったり、すみ分けたりすることも重要である。



# 5. 現代日本における「若者問題」

---

- 日本では、1990年代後半以降、社会の構造変化に伴い「若者が社会的弱者に転落する」事態が生じてきた。
  - 就職競争が激化し、不安定就労が増加するなど、学校から仕事への移行が困難になり、無業や貧困によって、親からの自立、家族形成、社会参加などに課題を抱える「フリーター」「ニート」の若者の存在が問題視されてきた。
  - 2000年代以降、労働や福祉の分野を中心に、「若者自立支援」施策が実施されてきたが、社会教育の取り組みは少ない。
- 
-

## 6. 「若者自立支援」との対比①

- 現在、日本では「就労支援」や「ひきこもり支援」など、困難を抱える若者へのターゲット・サービスは社会に拡大したが、（「喫茶わいがや」のような）「社会的居場所」や「中間的就労」などが可能な、より広範な若者が集まるユニバーサルな社会参加サービスが少ない。

→そこで、国立市公民館では、ターゲット・サービスと関連付けながら、進学や就労などが達成されたとしても、必要に応じて継続的に地域コミュニティのなかで関係性を育て、家族や学校、仕事以外の「居場所」となるコミュニティ参加を支援する取り組みを拡大する。

## 6. 「若者自立支援」との対比②

- 若者への「就労支援」「ひきこもり支援」などは、それぞれのニーズを個々人レベルで捉え、相談・ガイダンス型で個別に対応する「個別支援アプローチ」に特徴がある。

→一方、国立市公民館の取り組みは、若者が自らく型のある活動に参加し、いずれ多様な人間関係を結びあう無目的な「たまり場」への継続的滞在を通じて、就労やコミュニティから排除される若者たちがレジリエンスを発揮していく「集団支援（社会教育）アプローチ」として位置付けられる。

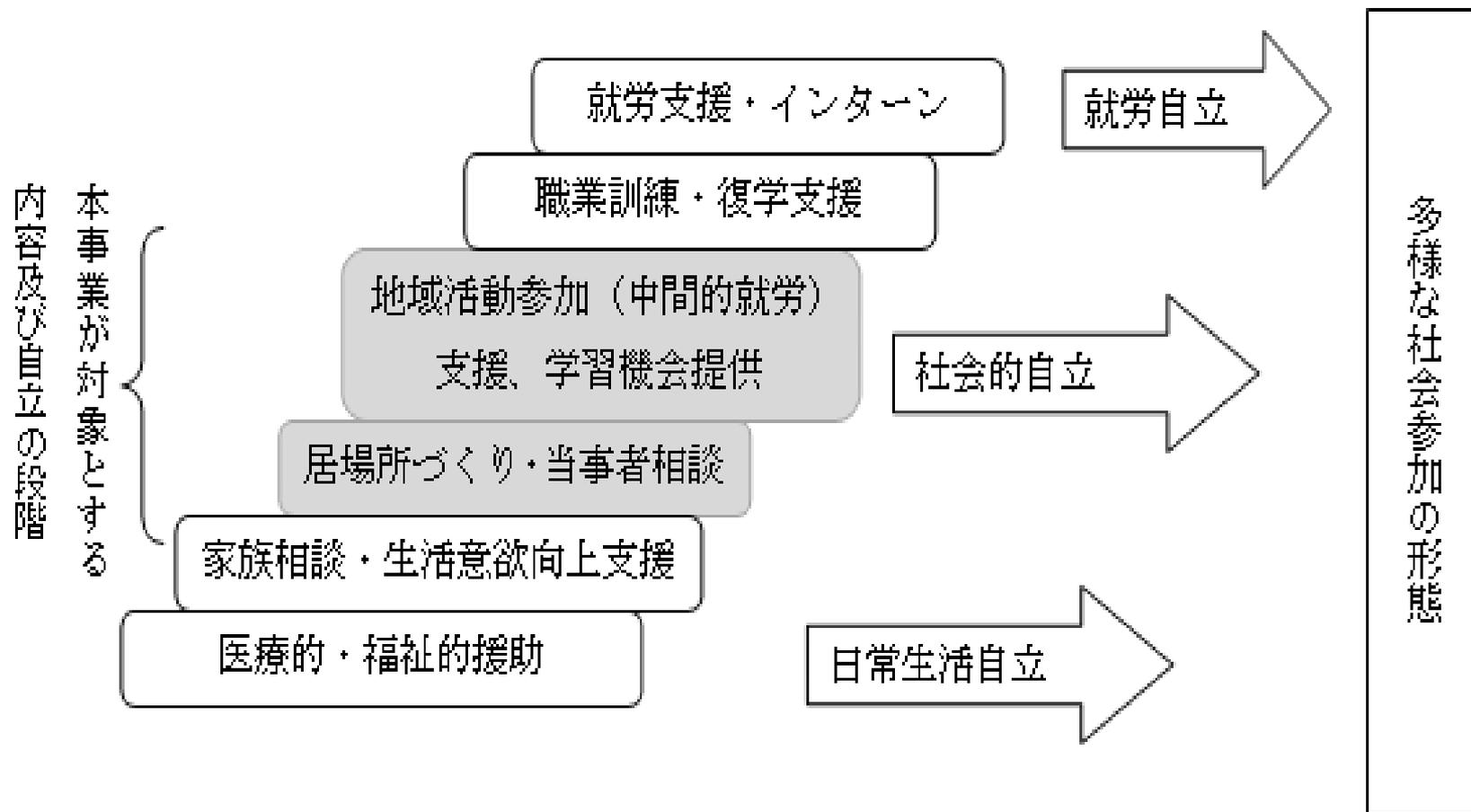
## 6. 「若者自立支援」との対比③

- これまでしょうがいしゃとともに積み重ねてきた実践を基盤に、現在、文部科学省「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」を活用した「自立に課題を抱える若者の社会参加支援事業」を実施している。

→国立市公民館が考える「自立」とは、誰にも頼らないで自分の脚で立つ「独立」(independence)ではなく、誰かに頼り頼られながら主体性を発揮できること(interdependence)を意味している。



# 7. 社会参加支援における公民館の役割



## 8. これからの課題

- 「たまり場」への参加は、実質的にはその場の存在を知りえた若者たち、主体的にアクセス可能な若者たちに限られてきた。そこで、今後は、とりわけ孤立し困難を抱え込んでいる若者への参加支援を充実させ、「つながる」回路を増やしていく。
- 課題を抱える若者のニーズに応えるために、多分野にわたる領域の支援者・関係機関とのネットワークをつくっていく。
- 公民館の職員目線で一方的に成果らしきものを報告するのではなく、参加する若者自身がどのような力をつけたか、自ら発信していく。